

第2回いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会 要点記録

会議名	第2回いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会
開催日時	令和2年6月24日(水)午後2時から午後5時まで
開催場所	第一委員会室
出席者	<p>[委員] 12人(敬称略)</p> <p>岡田匡令(会長)、木村政司(副会長)、駒形克己、杉田理恵、山口諤司、小林保男、帯刀繁、別府明雄、真木亨、山口藍、森弘、湯本隆(欠席:1人)</p> <p>[事務局]</p> <p>文化・国際交流課長 折原孝</p>
会議の公開(傍聴)	公開
傍聴者数	1人
議題	<p>1 検討会報告書の構成(案)について</p> <p>2 部会の中間報告について</p> <p>(1) 文化芸術部会</p> <p>(2) 多文化共生部会</p>
配布資料	<p>資料1 いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会工程表</p> <p>資料2 いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会報告書の構成(案)</p> <p>資料3 いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会傍報告書(素案)</p> <p>資料4 文化芸術部会 意見要旨</p> <p>資料4-2 作業シート/文化芸術編</p> <p>資料5 多文化共生部会 意見要旨</p> <p>資料5-2 作業シート/多文化共生編</p>
審議状況	<p>【開会】</p> <p>事務局: それでは、定刻より前になりますが、本日まで出席予定の皆様がお揃いになりましたので、ただいまから第2回いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会を開会させていただきます。私は、4月より文化・国際交流課長に着任いたしました、本検討会の事務局を務めます折原と申します。よろしくお願いいたします。それではまず、岡田会長からご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。</p> <p>会 長: 皆さん、こんにちは。新型コロナウイルス感染症の流行がなかなか終息せず、皆様におかれましても大変な状況であるかとは思いますが、本日は2回目の検討会ということで、中間のまとめをしていきますので、どうぞ活発なご意見をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>事務局: ありがとうございます。また、前回の検討会で副会長に選任されました木村副会長におかれましては、本日初めてのお顔合わせとなりますので、ご挨拶をお願いいたします。</p> <p>副会長: 皆さん、こんにちは。新型コロナウイルス感染症が恐ろしいものであるのはもちろんですが、すぐそこまで迫っていると言われる首都直下型の地震も非常に恐ろしいものであります。いたばし文化芸術・多文化共生ビジョンについては、</p>

検討会の中でも災害などの危機対策を踏まえて、文化芸術をどう推進していくのかという視点が重要だと考えています。どうぞみなさん、よろしくお願いします。

事務局：ありがとうございました。また、検討会の委員として区の職員が参加しておりますが、4月の人事異動に伴い新しい職員に変更となりましたので、ご紹介させていただきます。区民文化部長の森弘でございます。

委 員：森でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局：教育委員会事務局地域教育力担当部長の湯本隆でございます。

委 員：地域教育力担当部長の湯本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局：本日の会議では、新型コロナウイルス感染症の対策として、窓を開ける、席と席との間隔を取るなどの対応をしております。また、前回の検討会において、本会議を公開することと決定されましたので、会議録を作成し、ホームページなどで公開する予定です。

なお、本日は王委員がご都合により欠席でございます。また、1名の方が傍聴を希望されています。

はじめに、本日の配布資料の確認をお願いします。

(配布資料の確認)

それでは、引き続き進行を岡田会長にお願いいたします。

【次第2 検討会報告書の構成（案）について】

会 長：次第2、検討会報告書の構成（案）について、事務局から説明をお願いしたいと思います。

事務局：説明いたします。

(資料1、2の説明)

会 長：ありがとうございました。事務局から報告書の構成案について説明がありましたが、これに対して委員から何かご意見はございますか。

委 員：いただいた資料を拝見しながら発言する内容を考えてきましたが、「絵本のまちいたばし」というキャッチーな言葉はおおいに響きがある言葉だと思っております。ただ、現実を見ますと、宝の持ち腐れのような場面があります。ひとつには、今年は残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響で中止になってしまいましたが、毎年、ボローニャ国際児童図書展が4月に開催されます。そこで全世界から集められたイラストレーションの優秀な人たち、入賞された方々の展示会が板橋区立美術館で、毎年開催されてきました。今年に限って、ボローニャでは開催が中止になってしまったのですが、板橋区立美術館の方が頑張ってその絵本原画展を実際に今夏、開催するに至っています。板橋区立美術館は、長くボローニャとの関係を築いてきています。ボローニャで行われるもうひとつの大きなイベントに「ラガッツィ賞」があります。その年に、全世界の

出版社が発行した本の中から、優秀な本を選んで、ラガッツィという賞を授与するものです。応募の方法は、5冊の本をボローニャに送ります。その中から審査が厳選に行われて、受賞者が選ばれていくのですが、実は、板橋区にはここに応募された本のすべてが毎年寄贈されています。現在は、それを一般に向けて閲覧できるようにしていますが、残念ながらすべて外国語で書かれていて、一般の人たちにとっては、敷居が高いと感じています。ただ、研究者にとっては、とても貴重な資料になります。今後、リニューアルする中央図書館のなかに、そういったボローニャの書籍のアーカイブを構築するという計画があります。これらの有効な活用方法として、大学と連携するなどして、翻訳することも含め、一般の人たちが気軽に閲覧できるような、貴重な資料として活用すべきだと思っています。それから、具体的な施策として、ブックスタートというプロジェクトがあります。これは毎年行政から、その年に生まれた赤ちゃんに本が贈呈されます。日本の既存のブックスタートのプロジェクトは、すでに市販されている本の中から選んでいるという形式が大多数です。私は、かねてから板橋とボローニャとの関係性を見てきた中で、たくさんのプロの方々に関係に介在していることを把握しておりますので、ぜひともそういった方々のお力をお借りして、板橋のオリジナルのブックスタートをできないかなと思っています。そのための方法として、廃校の利用・活用がひとつ挙げられます。そういった空間に、講師としてプロフェッショナルな人たちを招いて、若いイラストレーターをトレーニングするなどして、ブックスタートのオリジナルな本づくりに向けたプロジェクトが実現できるのではないかなと思っています。板橋には印刷というものづくりの産業がしっかり備わっていますので、そうした意味でも、こういった試みは、とても大きなチャンスだと思っています。廃校の利用方法として、フランスの行政の取組みが参考になるかと思います。学校を卒業後、就職しても、2、3年でドロップアウトしてしまう若い人たちがたくさんいます。そういったドロップアウトした人たちを、三ツ星レストランのシェフが、半年間無償でトレーニングをします。トレーニングを受けられるのは、とても限られた人数です。ドロップアウトしてしまった若い人たちが、シェフから厳しいトレーニングを受けて、レストランのいわゆる下働きができるまで、自分たちのスキルアップをさせるという取り組みです。このような、プロフェッショナルの人たちとの交流の場ということにおいては、これから大いに活用されるべきであろう廃校という施設を利用していくことが望ましいと思っています。長くなりましたが、ひとつ目が絵本に関すること、ふたつ目がプロの人たちと一般の人たちの交流の場ということ、いずれもその活用の場を広げてほしいと思っています。最後に、板橋区立美術館、そしてリニューアルオープンする中央図書館、その中にボローニャの「ラガッツィ賞」のアーカイブができますが、それらは、どうしても点と点という存在になってしまっています。しかし、点と点をつなげば線となり、しかも線と線が交わっていけば、面ができます。そういうことを実現させていくためにも、行政だけではなく、大学、民間などがダイナミックに連携を取れる関係を築くということが、とても重要なことだと思っています。以上です。

会 長：ありがとうございました。

他に、この構成についてご意見はございますか。

委 員：板橋区は、昔から文化行政に力を入れていまして、文化団体連合会も創設して四十数年経っております。個々の団体では、例えば民謡連盟は創設してから今年で60年を迎えます。毎年板橋区主催で、10月1日から11月30日まで

2か月間の日程で、文化会館の大ホールで前夜祭を開催しておりますが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止になってしまいました。個々の文化祭も、会場が十分に使えないという可能性があります。新型コロナウイルス感染症による非常事態に、どうやって対応するかということを、これから25団体がそれぞれ考えていきたいと思っています。板橋区には郷土芸能団体連合会というものがあります。また、国指定重要無形民俗文化財になっている田遊びが二つあります。郷土芸能の9団体は、板橋区の無形民俗文化財に指定されていて、これだけ郷土芸能が残っている都市は板橋区だけです。ところで、25団体のうち、イベントを行って、文化会館の大ホールを満員にする団体は1つか2つしかなく、大多数が空席が目立つ状況です。区の広報で宣伝を行ってもらってはいますが、厳しい状況です。

板橋にはいろいろな特徴がありますが、中でも一番は板橋宿です。板橋宿というのは、どこの宿場でも通過文化の受皿です。そこでは、たくさんの文化が入ってきていますが、定着しない通過文化が多いのです。実は板橋のオリジナルは農業なのです。江戸時代に、100万都市を支えていた近郊農場として板橋は存在していました。それは戦後の昭和30年代、今の高島平のあたりが田んぼであった時代まで続きました。田んぼや畑は無くなりましたが、農業魂は残っています。また、他の区に比べて、いつも端にいますから、心情としては端の文化が根付いています。板橋区では、伝統的に文化行政に力をいれて、一つ一つの文化を盛り上げようとしています。本来、文化というのは日常生活の中で作っていかねばいけないのです。

「ふるさと文化」といって、教育委員会と共同で、小学校に郷土芸能を教えにいく事業を行っています。あるいは、個々にやっているところに、文化連のそれぞれの連盟が出張しています。

板橋区の課題は、新しく転入してきた住民と、昔から住んでいる住民の認識にずれ違いがあることです。これからは、若い人たちを中心とした文化、そして長く板橋で文化活動を展開した私たちが彼らと文化を共有していかなければいけないと思っています。

新型コロナウイルス感染症の影響で、様々なイベントが中断されたときにやめてしまうのではなく、小さくても、継続は力なりという意味で、いろんな形を残して終息したときに改めてもう一度、伝統ある郷土芸能、板橋の文化を興していきたいと思っています。以上です。

会 長：ありがとうございました。板橋における文化の具体的な取組みと、課題についてお話をいただきました。

他にご意見はございますでしょうか。

委 員：まず、構成についての意見です。資料2の目次内4章は削除し、5章に含めてはいかがでしょうか。4章は、文化芸術振興と多文化共生推進の連携についての章になっています。私は、本来、文化芸術の中に、国際交流の概念が含まれていると思っています。国際交流の中にも、文化の紹介、文化の理解が含まれています。2章と3章でそれぞれの方向性、施策を書いていくと、2章の文化芸術の中に、国際交流のことを書いていくことになると思いますし、3章では多文化共生の部分で日本の文化・外国の文化の紹介ということが出てくるので、4章というのは独立させなくても、具体策というのは書いていけると考えます。そして、理念や、基本目標のところで、SDGs等の内容を記載してはいかがでしょうか。例えば、文化芸術基本法の理念のうち、「文化芸術とは多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界平和に寄

与する」というものは、多文化共生の理念も含まれていると考えられます。

会 長：ありがとうございました。4章を独立させるべきではなく、その前の段階で十分に議論され、記述されたほうがいいのではないかというご意見でした。先の各部会でご検討いただいた内容を踏まえて、今のようなご意見をどのように扱うべきかという部分にも、ご意見をいただければと思います。今、提示されているものは絶対的ではなく、とりあえずこの形で議論をしていくものとして認識してください。

【次第3 部会の中間報告について (1) 文化芸術部会】

会 長：続きまして、資料3「いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会報告書(素案)」について、事務局から説明をお願いします。

事務局：説明いたします。

(資料3の説明)

会 長：ありがとうございました。事務局から説明があったように、報告書の素案は、文化芸術・多文化共生それぞれの部会の要旨をふまえ、資料として取り上げているということでした。これから、部会で検討された事柄について、「記載が望ましいかどうか」「足りていない視点がないか」「より適切な表現はないか」「ビジョンを策定するにあたって、他に検討する課題はないか」といった視点でご意見をいただきます。最初に、文化芸術部会の作業シートに基づいて議論を進めます。それでは、ご意見がある方は挙手をお願いします。

委 員：文化芸術の課題を見まして、板橋区は縄文時代から近代までの文化遺産が、他区と比べて、非常に揃っていると感じます。課題については、伝統文化に関しての記載が弱いので、もっと強調すべきだと考えます。なかでも、郷土資料館がより立場をはっきり出していったほうがよいと考えます。板橋区には農業から始まった伝統文化が長く続いておりますし、高島平は近代化の発祥の地のような特徴がありますから、そういった部分をより強調したほうがよいのではないかと考えます。文化芸術活動の場については、郷土芸能伝承館の活動が今のままでよいのかという疑問があります。地域の方が使うということであれば、伝承館という名称を、ホールに変えてしまったほうがいろいろな形で利用できるのではないかと思います。また、課題の中に、地域の芸術家支援が必要とありますが、伝統工芸士の後継者が不足していることなどを鑑み、伝統芸能への支援が必要と明記したほうがいいのではないのでしょうか。

会 長：ありがとうございました。他にご意見はございますか。

委 員：構成への意見なのですが、資料3の4ページ「海外の姉妹・友好都市との文化交流」と同じ内容が、14ページ「友好姉妹都市等との区民交流の促進」および「バーリントン市姉妹都市提携30周年記念事業」にも掲載されていますが、14ページの多文化共生の人づくりに関する内容は、より文化芸術について詳しく書いてあり、逆に、4ページには海外姉妹・友好都市との交流について書かれています。ここに書いてある内容は、文化芸術と多文化共生の共通項であり、連携できる部分であると感じます。これは報告書なのでやむを得ない部分はあるかと思いますが、この項目を入れ替えたほうが、読む側としては見やす

いのではないかと感じます。

そしてもう1点、14ページにある「だれにとっても本当にわかりやすいものを作る」ということを、「やさしい日本語」とはっきり明示したほうがよいと考えます。日本語がわからない外国人だけでなく、お年寄りや知的障がいをもっている方、子どもなど、誰にとっても理解できる日本語はとても重要であると思います。「やさしい日本語」を、福祉的な面も含めて推進すると明言してはどうでしょうか。

会 長：ありがとうございました。報告書のどの部分にウエイトを置いて記述するかという観点のご意見でした。正しいだけでなく、わかりやすい日本語を心がけるということ意味合いのご意見だと思います。報告書の素案は、部会から上がってきた意見をまとめているもので、ニュアンスが正確に表現されていないかもしれません。どのレベルまで記述するかという問題ですが、今回の報告書は方向性を示して、その後、具体的に落としていく過程があるものと思います。ここで最終的な課題を示すのは、報告書の範囲を広げすぎてしまうかなと感じます。今後の議論に示唆を与えるのが報告書の素案の役割であると思います。しかし、ニュアンスは伝わらないと意味がないので、今後検討を進めていくうえで今の意見は考慮していくべきだと考えます。

他にご意見のある委員はいますでしょうか。

委 員：今回の新型コロナウイルス感染症の対策で、いわゆる在宅勤務が普及したり、オフィスが都内に必要なのかという議論もされてきています。そのような状況ですので、高島平の魅力を、若い人にアピールできる形が必要だと感じます。建てられてから時間のたっている高島平団地などは、住んでいる人たちの高齢化が大きな問題になっています。ですので、若い人たちが移り住むような魅力的な建物にして、そこから発信していく発想や、さらにはプロフェッショナルとしての芽生えが生まれるような場所を、板橋区が後押しするのは難しいかもしれませんが、区の魅力を発信していくよい材料として作っていくべきだと考えます。

会 長：ありがとうございました。若い人たちが入ることで、一つの文化・社会を形成していくということでした。

他にご意見がある委員はいますでしょうか。

委 員：フランス人が板橋区に多く住むようになってきたと感じます。街中にある案内板などに、少なくとも英語が表記されているとよいと感じます。

また、フランス人が多く板橋区に住むようになってきているので、料理や芸術活動などフランス人と交流できる機会があればいいと考えます。

会 長：ありがとうございました。多文化共生の一つの方向性ということでした。

他にご意見がある委員はいますでしょうか。

委 員：資料を拝見し、その中に、「板橋らしい」という言葉が多用されていると感じました。「板橋らしい」とはなんだろうと考えてみましたが、まったく思いつきませんでした。「板橋らしい」という言葉が指すものの説明をするところから入っていったほうがよいと考えます。

会 長：ありがとうございました。従来から行政で使われている言葉を、わかりやすく

説明することが必要ということでしょうか。
他にご意見はありますでしょうか。

委員：板橋区の遺跡についてですが、板橋は3万年～3万5千年前から生活実態があり、そこに遺跡があり、現在は家が建っているところもあります。3万年以上も同じ土地に住めるということは、安全であるということです。板橋区は32.2平方キロメートルほどの面積があります。武蔵野台地といわれる区南部は、非常に土地が安定しています。

板橋区は、23区の中でも、郷土芸能が一番残っている区だと思います。しかし、この伝統を守るには、創造を加えていかなければいけないと考えます。文化芸術活動をしている人間が一生懸命になるのは、観客がしっかり観てくれているからであると思います。どのような分野でもいえることですが、文化芸術活動をしている人間自身の技術も重要ですが、それを観る観客側のレベルを上げるということがより重要です。マンネリ化してしまわないよう、板橋区では、新しい人たちに意見を出してもらったほうがよいでしょう。

また、新型コロナウイルス感染症により、今後、文化芸術をどのようにしたらよいだろうかと考える時間が増えたと感じます。

多文化共生について、外国人と共生しようとする前に、まず外国人の文化を理解しないとけません。外国人といっても、それぞれ人種の差があります。日本人は、人種の違いというものを普段感じることはありません。

委員：作業シート内今後の課題について、「板橋らしい」文化芸術や、板橋から文化芸術を発信していくという言葉について、具体性に欠けると感じます。「らしさ」という言葉が、どこに焦点を当てているのかわかりません。暮らしやすいまちであればよいのです。板橋区は、子どもも育てやすく、土地も堅牢にできているので、他の土地より安心できる場所だと思います。板橋らしい文化芸術を今後5年間で作るとするならば、若い人を中心にしなければいけません。新型コロナウイルス感染症のため、リモートワークが普及するなど、自分でもついていけないほど早い流れで世の中が変わっています。会社に行かなくても仕事ができるということについて、場所がなくてもできる、将来性のある仕事を見出すのは若い人たちの力がなければできません。

文化会館の老朽化や、伝統工芸の後継者不足に表れていますが、板橋区が持っている文化芸術や文化施設などのコンテンツは、数は多いのだが、全体的に古く感じます。郷土資料館なども、内容は良いとは思いますが、個人的に行ったことはありません。美術館もリニューアルしましたが、来館者数が少ないなど、もったいない部分が多いと感じます。板橋区は、持っている財産に対して胡坐をかいているように感じられます。これからは、若い人たちにゆだねて、情報発信も含めて、内容を更新していく必要があると考えます。「伝統文化は保存するだけでなく、活用の観点もふまえて検討したらどうか」という意見にあるように、例えば、伝統文化を、子どもたちの授業などで自然に使っていけるようであれば、子どもたちへの教育を通じて、持続可能な文化芸術振興が行えるのではないのでしょうか。今あるものの更新を行い、かつ、自分自身を更新していけたらいいと考えます。

委員：人種差別ということについて発言がありましたが、まず、お互いが違うという認識を持つのが一番重要であると考えます。これからは、日本の子どもたちが、海外からくる子どもたちと学校環境を共有することになります。海外に暮らす人たちの文化・言語を理解するためにも、毎年寄贈されている「ラガツィ賞」

の応募作品が、教材として最適です。これらはいたばしボローニャ子ども絵本館でも一般的には閲覧可能ですが、先ほど申し上げた通り、もう少し研究対象として取り上げ、さらに、可能であれば翻訳し、子どもたちが理解できる解説を加えるなどしていかないと、貴重な財産、アーカイブを生かしきれないことになるのではないのでしょうか。

また、区立美術館の不満点は、陸の孤島と言われるほど、アクセスが悪いことです。せめて、ロータリーバスの本数を増やすなど、ハード面でのバックアップを考えていく必要があります。ソフト面を推進していくことも重要ですが、併せてハード面での支援も考えていくべきであると思います。

会 長：ありがとうございました。

委 員：資料3、1ページ目（1）「一定の成果」にソフト面に関する記述を追加すべきということを事務局側に申し入れます。

次に、検討会として区が作成する基本計画作成に向けた原理を記述すべきだと考えます。板橋区の文化芸術振興条例の基本理念では、「区民の文化芸術活動の権利と自主性の尊重」を第一に掲げています。二つ目に「地域の特色ある文化芸術の発展」、これが先ほどから議論されている「板橋らしさ」につながってくるものになります。私も「板橋らしい」特色ある文化とは何だろうと考えているところです。他にも、「伝統文化の保存、文化芸術活動の保護と発展」、というものが重要です。区の役割は、環境整備を中心に全般的な計画を進めて、方向性を統一していくことだと考えます。地域の特色ある文化芸術について、先ほどから議論されていますが、子どもを大事にするということ、それに加え、高齢化率が25%と進んでいるので、高齢者も重要な役割を果たすと考えます。高齢者が文化芸術活動をすることで、生き生きと生活することができます。そういった意味では、子どもも大事だし、高齢者も大事だと考えます。

また、区民主体の文化芸術活動が盛んになるということが重要であると考えます。区民の文化活動は、一つ一つを見ると大変熱心にやられているので、区民が地域で10年20年と活動しているのであれば、それは「板橋らしい」活動であろうと考えるようになりました。私の周りでも、混声合唱団、吹奏楽団、区民参加型の板橋第九の演奏、区民参加型のオペラ、子供ミュージカルなどがあります。また、文化連の活動も地域でブロックごとに民謡大会、民謡教室があり、区民祭り、区民文化祭など、地域ごとの活動と、全体での活動と幅が広いです。こういったいろいろな活動をしているのが板橋区の特色ではないかと考えます。それをどうやってブランド化して発信するのかということが課題で、大きな問題だろうと思っています。そういう意味では、ストーリー性のある文化のブランド化と発信が重要になると考えます。そのほかに、一年に一回の発表のために、年間ずっと練習する方々へは、文化芸術へいざなう機会や発表の機会の充実が重要であるでしょう。

資料の中に、「産業文化都市」という言葉が突然出てきたことに違和感がありました。私の提案としては、「子育てを支援する文化芸術のまち」というような言葉がいいのではないかと考えます。「絵本のまち」ということについて、板橋区を「絵本のまち」という言葉だけではくれないと考えます。区内ではダンスやミュージカルもやっていますし、「落語のまち」というものもありますし、「〇〇のまち」という言葉は頻繁に使われているなかで、「絵本のまち」だけを強調するのは無理があると考えます。「子育てのまち」や、「区民が活発に、主体的に芸術を楽しんでいるまち」など、そういうくくりが必要ではないかと考えます。

部会では、アウトリーチ、ロビーコンサートについて肯定的な評価でしたが、問題点として、ただ行って演奏して喜ばれることが文化芸術を広めることにつながるのかということを感じております。お金を払ってホールに来てもらうことや、地域課題の解決につながるような文化の発信に貢献していかななくてはならないと最近考えています。例えば、福祉の森や福祉サロンなど、みなさんで活動されているところを応援する形で芸術を提供すること、地域課題を解決することを視野に入れた展開も必要だと考えます。

平成23年策定の文化芸術振興ビジョンにある言葉で、「地域の郷土芸能を多くの区民が知り、誇りに思うようになっています」には、郷土芸能だけでなく、区の芸術家や芸術活動を区民が知って、誇りに思ってもらいたいという思いが込められています。他にも、『板橋区出身』のプロの芸術家が多数育ち、区のイメージシンボルとなるとともに、体験講座を開催しています」や、「廃校などを活用した文化芸術拠点で、多くの区民や団体が集い、交流や情報発信の拠点となっています」「姉妹都市、友好都市との文化芸術関連の交流が行われ、多様な文化芸術に触れることができます」「伝統文化を通じた世代間交流や地域間交流が活発で、様々な出会いが生まれています」「外国籍の区民の方も、文化芸術を通じて共通の話題を持つことで地域になじみ、国際的な交流も活発になっています」などの言葉は、現在でも使われているものもあれば、忘れられているものもあります。情報を整理して、発信していかないと、情報が発散してしまいます。それが現状の残念なところです。

施策の方向性に加えてほしい項目として、「地域特性を生かした文化芸術の振興」、「区民主体の文化芸術の振興」があります。「芸術家支援」については、独立した商業ベースでやっている芸術家は限られているので、そこへの支援が必要だろうと考えます。そういう意味では、「活動への財政的支援の充実」も欠かせないでしょう。「区民と芸術家の橋渡しコーディネート強化」では、コンテンツのストーリー化などが必要になってくると思われます。「板橋区文化・国際交流財団の組織強化」では、文化会館は指定管理者が入っていますが、財団では、区の派遣職員が中心になっている派遣職員に代わり、固有の専門スタッフを充実させることで、専門性を持った形で芸術文化の支援を行っていくべきだろうと考えます。

会 長：ありがとうございました。具体的なもの、方針的なものが示されましたが、これは事務局に整理していただきたいと思います。

副会長：貴重なご意見を拝聴しました。

「らしさ」の話が出ました。「らしさ」というのは、「らしくない」ということから出てくる言葉なので、「らしさ」を多用する企業や組織は「らしくない」ことを自然に体の中で感じているはずで、「らしさ」を強引にキーワードとして出していこうという思いがあるから「らしい」ということを盛んに言っていると感ずります。我々が検討しているのは、ビジョンの報告書であり、宣言書ではないので、私は、みなさんから出た意見をすべて網羅して、報告すればいいと考えます。最終的には、それをもとに宣言するというのが目標・目的だと思っています。報告書に限っては、出たアイデアをすべて記載して、欲張って、板橋はこうあるべきだ、板橋はこうやっていこうというものにしたいです。出たアイデアは実行するしかありません。実行して成果が出れば、それが「らしさ」になっていきます。「らしさ」や板橋を愛する心で考えたアイデアは、継続的に実行するしかありません。なので、報告書は、検討会の委員から出された意見をすべて網羅して、板橋区の「らしさ」はこれだけあるのだという表明

する報告書になってほしいと考えます。

会 長：ありがとうございました。

【次第3 部会の中間報告について (2) 多文化共生部会】

会 長：先ほどと同様、多文化共生部会についての報告をいただいたので、このことについて、作業シートに基づいて議論いただきたいと思います。

文化芸術と多文化共生は表裏一体をなすというご発言もございましたので、そういった点も踏まえて、議論いただきたいと思います。

では、お願いいたします。

委 員：これからはジェンダーの問題が、学校教育の場面でも出てくると思うのですが、そういったジェンダーの問題を、文化の中でどう育むかという視点がこれからは必要なのではないかと考えます。こういった考え方は、教育の現場で特に顕著であり、また絵本の中でも、子供たちにどう「男らしさ」「女らしさ」を伝えることができるかという試行錯誤があります。なので、表現レベルでジェンダーというものとどう向き合っていくのかということも、一つ問題提起として挙げられたらと思います。

委 員：「らしさ」の話題ですが、企業のなかでは、「男らしさ」「女らしさ」というのはハラスメントに該当する言葉です。「らしさ」の定義について意見を述べさせていただきますが、私は、「らしさ」という言葉を使うべきではないのではないかと思います。非常にあいまいな言葉だと思いますし、人によって解釈が異なるということを、ビジョンに書くというのはいかがかなと思います。

会 長：ありがとうございました。「板橋らしい」というのは、区が今後どのように取り組むかの姿勢を示す言葉であると感じます。文化芸術振興および多文化共生にむけて、どう取り組んでいくか。大きな姿勢というのは地域・行政によって違いがあります。地域として、どう取り組んでいくかという意味でのらしいとご理解ください。言葉の使い方については、あいまいなまま使わないよう、検討会として気を付けてまいりましょう。

委 員：条例では、板橋区の特色ある文化を振興していこうということになっています。板橋区の文化を区民が素晴らしいと思ってはじめて、それを外に発信していくことができるものですので、どういうものが特色あるものかということは、ある程度イメージを共有する必要があると思います。それは、「らしさ」とは少し違う議論だと思います。いろいろな文化活動があって、人びとが活動していて、まちが元気になる、人が元気になるというのが現実の力だと思いますし、そういったものが広がっていくのが文化芸術振興の一つの方向性ではないかと考えます。

委 員：先ほど、「やさしい日本語」のことを取り上げましたが、ここでも取り上げたいと思います。先日、多文化共生部会を見学した際に感銘を受けたことがありました。それは、学校で日本語指導員をしている方のお話で、有償ボランティアに交通費程度しか支給されていないというものでした。現在、外国人住民が増えていて、外国人の子どもの数も増えていきます。そういった子どもは、将来も日本で暮らす可能性が高いです。そうすると、教育の部分が問題になると感じ

ます。外国人の子どもを対象とする、入学前のオリエンテーションについてですが、日本の学校制度は、他国と比べて、特殊なものが多いと感じます。そのため、まず親がどうすればいいかわからないのです。単純に日本語の読み書きができないのがありますが、国・地域によっては、女子児童が学校に通えなかったり、宗教の問題があったりなど、事情はいくらでもあります。そのような環境で育つ子供は、将来、生活を送ることが困難になってしまいます。そういった人を減らすためには、教育が非常に重要だと考えます。まず、入学前に、外国人の親たちに日本の教育制度を理解してもらう必要があります。相談会などを、年に1回でもいいので、実施するといいいのではないかと考えます。

「やさしい日本語」について、職員研修を行っているとは思いますが、それがどの程度職員に浸透しているのかという部分が非常に難しいところで、毎年継続していくということが重要だと考えます。首都直下型地震がいつ起きてもおかしくないという話がありましたが、これが外国人にとってとても重要なことであり、外国人は言語の壁や国籍の違いから、避難所に行くことに恐怖心を感じています。そういった人たちの意識啓発が重要であり、いかに自助ができるようにするかというのが非常に大事だと思います。もちろん語学ボランティアも必要ですが、それだけでなく、地震が起きた時に、いかに自分が生き残るか、そして自分が生き残った後に、いかに周りの人間を助けてあげられるか、というような教育をしなければならないと感じます。日本は高齢化しているため、若い外国人が共助までできることを目指すべきです。

会 長：ありがとうございました。日本語教育ということだけでなく、仕組みについて理解してもらうか、そのためのサポート体制を充実させなくてはならないということだと思います。

委 員：今は読解力が問題になっていると聞きますが、読解力低下の大きな原因は、母親が胎児に話しかけなくなっているためです。SNSが流行することで、だんだんと話しかけなくなっていくます。言語学では、胎内で、言葉の響き聞くことで、赤ちゃんはまず母音を確立していきます。そして、生まれた後に子音を確立していくということが明らかになりつつあります。胎内での確立がないと、読解力の低下や、場の雰囲気が読めなくなってしまうことが明らかになっています。言葉の問題というところからいうと、みんなで話すということが大事かと思います。日本語の独特なリズムを身に着けることが重要になります。これは外国人の方が俳句や短歌をやることで身についていくことです。文化芸術と言語は密接につながっているものであります。外国人の間に生まれてきた子どもたちに、日本語のリズムを身に付けてもらえるような環境を整えてほしいと思います。そうすることで、災害時にも、緊張をほぐすような言葉の遊びができます。ありとあらゆる方法で、日本語は面白いと思ってもらい、その後に様々な外国語が身につくような仕組みづくりを構築していただければと思います。

地震に関してですが、大使館は各地区で一人ずつ、地域の外国人をまとめるコーディネーターを作っています。そういった人々を集めて、区役所で研修をするなどすれば、情報収集・情報発信がうまくいくのだと思います。各大使館との連携を深めていくのも、一つの方法だと思います。

会 長：ありがとうございました。具体的にやっている取組みについて、理解がないことで、すべて行政がやるものだと思って、かえって手が届かないということにもなります。板橋区は、区民とともに作る板橋なので、行政がすべてを行うの

ではなく、区民がすることを、区と一緒にやって、あるいはそれを支援したりするようなスタンスで今まで来ていると思います。それが多文化共生の中でつながっていけばよいと考えます。

委員：多文化というと、外国人の方との関係にばかり目が行きがちです。文化会館を借りて、年に1回、「ふれあいコンサート」を実施しています。目玉として、障がい者の手話ダンスを毎年行っています。1年かけて練習したものを、4～5百名の前で披露していただきます。障がい者の方から、練習はするけれど、機会がないので、こういう場をいただいて嬉しいと、話をもらったことがあります。こういったことを、多文化の範疇に加えてもいいのではないかと考えます。

会長：ありがとうございました。ダイバーシティも、広く言えば多文化共生ということになります。今までは、区民であるとか、地域であるとか、比較的目に見える部分の話が多かったですが、ジェンダーや障がいのような、インクルーシブな分野の問題に文化として関わっていくことができるのではないかと思います。

また、最近は今までと違い、決まった楽器を演奏するのではなく、様々な音を組み合わせ、音を楽しむという取り組みもあります。障がい者に楽器を扱えなくとも、彼らに出せる音を組み合わせ、音楽にするというような取り組みも、お互いを理解することにつながっていきます。国際交流は、各国との文化的な交流を指しますが、社会として考えると、もう少し広くとらえてもいいのではないかと思います。

委員：事務局に対してですが、資料3の17ページで青少年の施策は充実していると思いますが、現場でみると、充実しているとは言い難いです。入学前のオリエンテーションに不安があるという声が聞かれます。ボランティアの方に日本語教室を週に5コマやっていますが、スタッフから、大人だけでなく、子どもも対象にしたいという声が聞かれます。しかし、現在の体制ではそこまで対応できないという状況です。板橋区は外国人が2万8千人という人数で、これは自治体の中でも相当多い人数です。半分以上が中国の方、アジアの方になりますが、これだけ人数がいると、何かしらの課題が出てくるものだと思います。違法民泊やゴミ出しの問題なども出てきていますし、そのほかにも様々な課題が出てくると思います。しかし、行政の側ではそういった問題を把握できていないように見受けられます。それぞれの外国人コミュニティが様々な問題を処理しているのかと思います。現在でも外国人住民は2万8千人いて、これからさらに増えていきますので、情報はしっかりと収集していかなくてはならないと感じます。

日本語教育については、ボランティアで運営しておりますので、一週間で受講できる人数は100名程度です。外国人住民2万8千人の中で、日本語ができるのは本当にわずかです。私が関わるのは地域のリーダーのような人であったり、日本人に関わろうという意思を持っている人たちがほとんどです。実際には、無償ボランティアの方々の支えによって、地域の交流が成り立っていると感じます。しかし、見えないところでもう少し交流しなくてはならないですし、無償ボランティアだけでは成り立たないのではないかと思います。区民の方がやっている日本語教室が区内に10教室ほどあるのですが、それは自費で区の集会所などを借りて運営しているもので、我々も多少は助成をしていますが、ほとんどご自身でやっているとても素晴らしい活動です。しかし、そろそろそこだけでは成り立たなくなっているのではないかと思います。

あるべき姿、施策の方向性については、まず日本語教室の専門スタッフの配置が必要で、ボランティアだけでなく職員が必要です。次に多文化共生センター等の活動拠点を整備して、ボランティアの活動を支援する必要があります。次に、外国人のニーズや課題の把握、相談体制の整備をして、生活実態を把握する必要があります。次に、行政の翻訳通訳体制の強化について、現在、板橋区の行政文書の多言語化を行っているのは財団ですが、財団からはボランティアへ依頼をしている状況です。窓口の通訳も、現在は電話通訳を主として使っていますけれども、この体制も強化していく必要があると思います。次に災害時ネットワークの構築を行い、外国人がわかる言葉で情報を提供できる体制づくりが必要で、研修などに参加した方の組織化をする必要があります。最後に、区の施策と財団、区民の取組みの区分と役割分担、区の財政支援が重要であると考えます。

会 長：ありがとうございました。具体的な日々の取組みと、その中で課題として感じているご発言でありました。

委 員：これから様々なことを行うのも大事ですが、板橋には今までやってきた既存の行事もあります。板橋区には田遊びというのがあり、農業まつりというものもあります。家庭菜園もやっています。それから、水車公園（田んぼ）がありまして、年に1回、子どもたちを中心に田植えと稲刈りを行っています。しかし、ここに挙げた事業は、すべて区の主管課が異なります。これらを、すべてひとつにすれば板橋らしい行事が誕生します。例えば、農業まつりの宝船を、家庭菜園で育てた野菜で作ろうといった試みだったりすると思います。これらの祭りを一つにまとめると、農業まつりではなく、板橋らしい一つの祭りになるのではないのでしょうか。日本の田遊びは子どもを育てるにはどうしたらよいかという発想を含んでいるようです。田遊びを、子どもを育てる原点のような形でもっていくと、一つの大きな祭りに大勢の人間が参加できると思います。区民祭りを宿場祭りにしたらよいのでしょうか。志村はものづくりのまちだから、ものづくりの祭りをしたらいいのではないのでしょうか。板橋区には、目を凝らせば使えるものが多くあると考えます。

会 長：ありがとうございました。体験を通して共生するというご意見でした。

委 員：学校でも、中国人の子どもが日本語がわからないケースが多くありました。出稼ぎに来ている親は、中国人の店で働くから問題はないため、子どもには構わないのです。そういった子どもが多かったため、学校の日本語教室では収容しきれないほどになってしまいました。そういった親については、日本に来る際に、日本語を勉強してこないといけないとPRしなければならないでしょう。胎児がお腹の中で言語を習得しているということですが、昔は会話が非常に多くありました。特に2世帯、3世帯で暮らしていれば、家族と話す機会は多かったでしょう。一見無駄に見える会話でも、それが役に立っていたのではないかと感じます。現在は、親が子を預けることが多くなり、親子が話す機会が少なくなっています。私の家の前の公園でも、親と買い物のついでに訪れた子供は、やはりよく会話をしているようです。やはり、そういったことがないと、言語は発達しないのではないかと思います。読解力のお話に関連しまして、現在は聴解力、聞く力がなくなっていると感じます。聞く力がつけば、読解力もついてくるので、音読や、話を聞く訓練をしたほうがいいのではないのでしょうか。

有償ボランティアについて、有償といいましてもほぼ無償みたいなものだと思いますが、観光協会にも「おもてなし会」というものがありまして、観光施設や伝統文化の紹介をしています。このような方々もボランティアですが、交通費程度しか出ていないということです。このあたりの支援があるとよいのではないのでしょうか。

板橋区で国際会議があつたりすると、郷土資料館で鎧の着付けをやっています。おおむね好評で、日本の文化に近づける意義のあるものとして行っております。実施はいたばし武者行列保存会が担当しています。在住外国人にも着付けを行うこともあります。

会 長：文化を体験しながら、ノンバーバルランゲージを活用していこうというご意見でした。コミュニケーションのうち、言語で伝わるのは20パーセントで、残りの80パーセントはボディーランゲージや雰囲気が占めていると言われていいます。外国人とのコミュニケーションは、そういったことを生かしていくとよいかと思えます。

また、外国の方がきて、夜でも過ごせる場所。例えばサロンであつたり、そこに行くとも母国の雑誌や写真が見られたり、同郷の人と会えて、同じ言葉で話せるような場所。そういう場所が必要なのかなと思います。外国人が日本に永住できるものをどう考えていくかということが重要ではないのでしょうか。

委 員：学校でも、子ども同士はボディーランゲージでコミュニケーションをとっているため問題はないのですが、親の仕事が忙しかったりするために、彼らが保護者会や個別面談に来られないことがあつたり、保護者間の SNS ツールで連絡がとれないというようなことが多数見受けられます。また、外国人の保護者同士でもコミュニケーションを取れないこともあるようです。語学ボランティアも当然必要ですが、現在は携帯電話が普及しており、多くのアプリケーションも存在しているので、翻訳ソフトなども使っていきながら、自らコミュニケーションを図れるようにしていかなないと、隣人同士の交流を行うことができないのではないのでしょうか。本人にとって何がよいだろうと考える想像力が、地域の交流などにつながっていくと考えます。日本の小学校ではもちろん日本語しか話されないですが、そのなかでも、ローマ字の表記や、簡単な英語を掲示すれば、子どもの目に自然に入ってくるでしょう。それは区役所や図書館でも同じことだと考えます。多文化共生が意味するものは、外国人を対象とすることはもちろん、それに加えて、障がいのある方や、個人それぞれの文化というものもあります。そういったお互いの文化をどう理解していくかということが重要だと考えます。そのための教育も同じく重要ではないのでしょうか。

会 長：ありがとうございました。文化といっても、食文化など、様々存在しています。そういった、自らと異なる文化を持った人に対する理解が日本人には不足している、というご意見だったかと思えます。我々が理解しようという努力と、外国人が理解しようという努力の両方をサポートできる仕組みづくりが必要であると感じます。

委 員：資料の中で気になった言葉として、「巻き込む」というものがあります。私も今まで、様々な方を巻き込み、みんなで一丸となってプロジェクトを行ってきました。キーワードとして、広場という言葉があります。日本には、様々なお祭りがあります。老若男女が集まって、対話をして、嬉しいことや悲しいことを話し合う広場がありました。しかし、最近はお祭りもなくなってきました。

そういった状況のなかで、多文化共生部会を開いて、検討して、どのように多文化共生をしていくかと話し合っているのです。こういった部会があること自体、多文化共生ができていない証拠なのではないでしょうか。私が常々学生に言うこととして、キーワードやプロジェクトは、苦し紛れに出したものでないようにしろということがあります。私は現在、「アゴラ（広場）構想」というものを持っています。アゴラを作ると対話が生まれます。今の若者でいうと SNS です。オンラインツールを活用すると、物理的に日本に来られない生徒が、授業に参加できます。それで救われる生徒もいるのです。会えないけれど話したいという願望をかなえられる場を作っていきたいと考えます。アゴラを作り、動かす人、アゴラーが、アゴラを動かすことのできる仕組みづくりが必要ではないでしょうか。机上の空論ではなく、実践すること。多方面を巻き込む施策が必要とされていると感じます。

会 長：ありがとうございました。日本人が苦手とする「行動すること」が必要であるということだと思います。日本人は他人を巻き込むということが苦手です。一方、巻き込まれるのは好きという習性もあると感じます。日本人全員が巻き込む役割を求められるのではなく、誰か、イニシアチブをとる人がいればいい。そして活動する場を誰が作るのか。民間なのか、行政なのか。最終的に区民や外国人を巻き込んで、活動が起こってしまえば、行政は潤滑油としてサポートする役割を担えばよいでしょう。そういった仕組みづくりをどのようにしていくのかということが重要ではないでしょうか。ただ、箱を作るのではなく、活動をサポートする発想が必要です。

この検討会で出た意見については、部会の考えを否定するものでなく、補完するものになります。文化芸術振興と、多文化共生推進の連携について、平面的に示すのではなく、立体的に示したほうがよいかもしれません。立体構造的にして、三角錐のなかに文化芸術、多文化共生、連携の3つの要素を組み込めばよいのではないのでしょうか。

委 員：本日の議論で、「板橋らしい」という言葉ではなく、「地域に根差した」、のような言葉を使用していくべきではないかという議論がありましたが、私としては、アイデンティティというものを大事にしていきたいと考えています。

また、文化芸術が新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けている中で、今後どのように発表の場を確保していくかということが大きな課題であると認識しています。多文化共生の分野でいうと、災害対策の問題が非常に大きな課題になると考えます。そして、議論のなかにありました、多文化というのは外国人のことだけではなく、LGBT などを含んでいるという議論もございました。このビジョンとしてどこまでをターゲットにするかということは整理していく必要があると感じます。

委 員：皆様のご意見にもありました通り、板橋区は非常に多様な面を持っています。地域ごとの文化や成り立ちがあり、多様性があると思います。その多様性の中でも、加賀地域では史跡公園構想というものがあります。加賀地域は歴史のなかでの重層性があり、江戸時代は宿場町であり、宿場文化がありました。戦前は火薬製造所という面があり、戦後は研究施設が発展し、文教地域となりました。このように、一つの地域でも様々な面があります。

会 長：ありがとうございました。次回、最終的な報告書の原案を議論していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

	<p>これで閉会としますが、事務局から何かございますか。</p> <p>事務局：本日はご出席いただきありがとうございます。長丁場でしたが、ありがとうございました。</p> <p>会 長：これにて閉会します。本日はありがとうございました。</p>
	<p>【以下、後日書面にて提出された委員意見】</p> <p>委 員：「らしさ」という表現が話題になりましたが、“らしい”は推量とかあいまい、ふさわしいなどの意味があるようですから、表題に使うのは誤解を招くのではないかと思います。</p> <p>趣旨は、「板橋区固有の文化、板橋区の特徴的な文化」ではないかと思います。元々板橋区の文化は農業に起因するものが多いのですが、古代から近世にいたるまでを分類すると良いのではないのでしょうか。</p> <p>一方、文化を時代で分類すれば、過去・現在・未来に分けられるのではないのでしょうか。</p> <p>旧ビジョンでは、美術館の存在が重く取り上げていますが、貴重な浮世絵を多数保管しているとは言え、板橋区の資産ではあるが板橋固有の文化財ではないと考えます。</p> <p>板橋の歴史的文化を保管・維持しているのは郷土資料館と公文書館ではないかと思います。板橋の文化を語る上では、郷土資料館と公文書館を重視すべきではないのでしょうか。常設展示は板橋区の歴史を示すものでありますが、小学校の教材として利用される側面があります。企画展示では、毎年、板橋区由来の展示が行われているのではないのでしょうか。</p> <p>図書館は、それぞれが地域資料を保有していますが、専門家がいるわけでもないの、もっと活用できると良いでしょう。</p> <p>伝承館は、伝統芸能の助成・維持に特化したほうが良いのではないのでしょうか。無理であれば伝承館の名を標榜しないことも視野に入れるべきです。</p> <p>絵本館は絵本文化の担い手として絵本のまちの推進役となりますが、現代に生れた文化であることは確かです。</p> <p>史跡公園は、未来に残す過去の文化財。戦争を賛美する事ではなく、戦争を機会に発展した科学・工学の進歩を象徴するものとして公開するべきです。</p> <p>板橋区のビジョンとして、古い文化を維持継承するのか、現代の文化活動を支援助成するのか。板橋固有の文化遺産を重視するのか、区には無関係な文化財を重視するのか。このあたりを検討していく必要があるのではないのでしょうか。</p> <p>伝統文化に触れる機会はとても少なくなっています。元々は村の行事で、区民</p>

	<p>全体に見せる前提のものではないから当然でしょう。ただ、近年はアクトホールでの発表や学校での紹介などもあり見る機会は多くなっています。</p> <p>それでも PR が十分でないという意見もあります。しかし、伝統文化は本人が積極的に見る機会を探すべきで、さまざまな PR をしても無駄であると考えます。むしろ、伝統行事に興味を持たせるような施策が必要かと思われます。</p> <p>伝統芸能や遺跡などのある地域の小学校では、総合学習の時間にその地域の文化に触れる機会を多く持ってほしいと考えます。</p>
所管課	区民文化部文化・国際交流課 文化・国際交流係 （電話 3579—2018）